練習帳

s2

『高校生のための実践劇作入門』には、400 字の原稿用紙５枚以内の戯曲を書くという課題がある。
　状況は、例にあった好きな人と二人っきり、というのにしてみる。

〇小さな喫茶店の事務所

　狭い部屋で、食料品や食器の予備、事務机などで更に狭く感じられる。　ユキコが机に座って小物を弄っている。　上手からマコトが歩いて来る。

マコト　お疲れ。お先。
ユキコ　えー、帰るの？　店長車取りに行ってるんだけど。
マコト　いや、もう着替えたし。
ユキコ　もうちょっと待ってよお。
マコト　まあ、いいけど……。
　マコトは上着を着る。着終わってから

マコト　最近、僕のこと避けてない？
ユキコ　避けてないよー。
　互いに互いの目を見合って、沈黙する。

マコト　そう？
ユキコ　うん。店長今日機嫌悪くなかった？　やだよねー。家で何があったか知らないけどさ、わたし達にぶつけるなっての。ねえ？
マコト　まだ奥さんと仲悪いの？
ユキコ　（自信を持って）うん。……そうみたい。
マコト　子供がいるんだからせめて怒らせなければいいのにねえ、仲良くしなくても。
ユキコ　だよね。仕事中に電話とかマジ困る。むかつく！
　外から自動車の大きなエンジン音が聞こえてくる。それは止まり、自動車のドアの閉まる音。

ユキコ　あ、カプチだ。
マコト　じゃあ、そろそろ帰るかな。
　下手から店長が入ってくる。

店長　おう、マコト。終わったか。
マコト　はい。

　店長、机の上のコーヒーカップを取ってユキコに渡す。

店長　ユキ、これ、向こうのテーブルに置いて来て。
ユキコ　はーい。
　ユキコ、上手に歩いて消える。

マコト　じゃあ、僕そろそろ失礼しますね。お疲れ様でした。
店長　おう、お疲れ。また明日な。
マコト　（上手に向かって）ユキコちゃんもお疲れー。

ユキコ　（上手から）ハーイ。お疲れ様でーす。

マコト、下手に消え、幕。

所定の枚数には足りなかった。

今日も「好きな人と二人きり」という状況で。
前回は怠った「声を出して読む」ということを、今回はした。それだけで巧くなるわけではないようだ。

第一幕

〇マコトの部屋　　アパートの一室。　　マコトとカズノが、座卓を挟んで座っている。どちらも二十歳前後。

カズノ　どうして、マコト！　わたし悪いことした？
マコト　（じっとカズノの目を見ているだけ）
カズノ　理由くらい言ってよ。そしたらここ出てってもいいからさ。
マコト　ふむ。カズノと別れて一人になりたくなったんだ。
カズノ　嘘。毎日べたべたして、楽しかったじゃない。それは無いでしょ。
マコト　突然だからね。
カズノ　（立ち上がって）馬鹿にしてんの！？
マコト　（立ち上がりながら）とにかく理由は言ったよ。荷物纏めといて。
　　と、マコトは立ち上がり、下手へ去る。　　消えるまでそれをじっと見詰めるカズノ。肩が震える。
　幕が降りる。

第二幕

　幕が上がる。十年後。
〇ファーストフード店　　混み合う店内。　　３０歳のマコトが、第一幕と似た服装で二人掛けの席に座って雑誌を読んでいる。テーブルにはカップ。周囲にも客が座って歓談している。　　と、上手からトレーにカップと食品を乗せたコート姿のカズノが現れ、店内を見回した後マコトがいる席へ向かって、トレーをテーブルに置き、椅子に腰掛ける。コートは脱がない。　　マコトは驚いて雑誌から目をカズノに移す。

マコト　カズノ？
カズノ　聞いたよあの歌。
マコト　『しかたないさよなら』？
カズノ　うん、デビュー曲。すぐに分かった。分かり易いよね。
マコト　ははは……。今日は悪いね、忙しいところ。
カズノ　（カップに砂糖を入れながら）いいよ。こっちこそまともに時間取れなくてごめん。お陰でこんな所で会うことになっちゃったし。
　　と、カズノは店内を見回す。

マコト　（皮肉っぽくわざとらしく）ちょっと残念かな。
カズノ　でも、新曲出たらチェックしてるけど、あの曲以来売れてないよねえ。今デビュー１０年？
マコト　自分でもよく続けてられると思うよ。こんな所で一時間いても誰も気付かないくらいなのに。マネージャー達には感謝しないと。
　　カズノ、ミルクをコーヒーに入れる。

カズノ　わ、掛かっちゃった。六つ折取ってくれる？
マコト　（六つ折をカズノに渡しながら）あれ、それコーヒー？　飲めるようになったの？
カズノ　（呆れた様子で）そりゃあ……。
マコト　（軽く自嘲的に）俺は相変わらず紅茶駄目だけど。あの純粋な苦味がどうもね。
　　と、マコトは笑う。

カズノ　そういうところ変わらないよなあ。
マコト　別に紅茶くらい飲めなくたって……。
カズノ　（遮って）違う違う。大げさな言い方と、あと、自嘲的なところ。１０年前とおんなじ。
　　マコト、言葉に詰まる。

カズノ　最近の曲とそっくりだよ。『しかたないさよなら』はうまくやったのにねえ。あれ聞いたときはオッと思った。まあ、わたしが一番楽しんだ曲だろうし、当たり前かもしれないけど。……ちゃんと恋してる？
マコト　いや……。（俯きながら溜息混じりに）だからあんな曲しか描けないのか。
　　カズノがマコトの顎に手を添えて上向かせる。　　周囲の客がそれにぎょっとした目を向ける。

カズノ　喋る時はちゃんと相手の顔を見ようね。昔っからずーっと思ってたんだけど、言っとけばよかったかな。
マコト　（カズノをじっと見て）今日は話せてよかったよ。
カズノ　そういや、話って何だったの。ごめんね、呼ばれたくせに自分の喋りたい放題。
マコト　たまに顔を見たくなったんだ。
カズノ　ずっと連絡無かったのに。
マコト　突然だからね。
カズノ　……馬鹿だねえ。
マコト　（腕時計を見て）そろそろ時間？
カズノ　あ、もう？　（立ち上がってトレーを持つ）じゃ、これで。バイバイ、頑張ってね。
　　マコト、手を挙げて応える。　　カズノ、上手に消える。　　マコトはカズノを見送った後、姿が見えなくなってからコーヒーを啜り、息を吐く。　　幕が降りる。

「幕」という言葉の使い方がこれでいいのかは分からない。

あたしはアクセルを踏み込みながらあいつのことを思い出す。
赤信号が見えてくる。無視。
和田二郎。あいつはあたしがみんなに信じ込ませてきた仮面を簡単に見破って挙句にこう言ったのだ。「黙っててあげるからもう本当の生き方をしたら？」。死んでしまえ。
車を衝撃が襲った。あれ、あたし前見てなかった？　先行車にぶつけた？
また衝撃。
ボンネットがへこんで血溜まりができていた。

●　●　●

妙に心が静かだった。
家のインターホンを押す。
あのあと車を止めたボンネットの血溜まりから血が吹き上がって空まで飛んでそのまま雨になって降り止まなくなった。車は捨てた。
だからあたしは血まみれ。血まみれのあたしの前にドアを開けて真っ白なＴシャツを着た和田二郎が姿を現す。そしてにこりと笑う。むかつく。
「好きなの」。そうだ。あたしは和田二郎に告白する気になったのだ。
和田二郎はあたしを抱き寄せてキスをして白いシャツは真っ赤に染まってなんだかかっこいい模様になってしまった。

右に座る男の人がコーヒーに手を伸ばすのと、わたしがカフェオレのカップの取っ手のつるりとした感触を指の腹に感じるのとが一緒でわたしは背中がぞくぞくする。首筋がぴりぴりする。

喧騒絶え間ないミスドの中でわたしは音を失う。

雑誌に視線を落としたままコーヒーを啜るその人がわたしを意識しているのが分かる。わたしには分かる。

こんなに強い繋がりは初めてかも知れない。強い繋がりを感じた時にはいつもそう思うのだけど。そんな余計なことを考えながらも意識の大部分はわたし達二人の空間に向けられていて、この緊張感を持った、わたしと指輪がごつい隣の男の人と二人の座っている席とそれら全てを包む「この辺り」からなる空間の特別さを保持しようと努めている。

わたしが読んでいるルポのページをめくるとすぐに、隣でも雑誌が音を立てて次のページを見せる。わたしに聞こえるのはこの辺りの音だけ。外にあれば、一メートル先の音だってわたしには届かない。光も届かないから色褪せている。

こうして自分以外の人と自分とが一緒になってしまうことがたまにある。わたしが飲んでいるのはカフェオレの筈なのにコーヒーの香りがしてきたり、右に座るその人の更に右の通路を店員が通る時、間近にあるかのように表情が見えたりする。男の人が動きの同じわたしを訝って、段々それを心地よく感じ始めているのを感じることさえできる。

特別な空間。特別な時間。何がわたし達の空間を結び付けて濃度を一緒にしてしまっているのだろうとわたしは考える。この白いカップだろうか。座っている姿勢？　本を読んでいるということ？　それは分からない。いつも分からないしこれからも分かることはないのだと思う。でも考えてしまう。

考えながらドーナツを一口齧ると当たり前のように隣でもそうして、意識が互いに寄り掛かって支え合う形になっている男の人の心地よさをわたしまで感じてしまう。咀嚼するその人の口の動きの一つ一つをストップモーションのように認識して一枚一枚記憶の箱に収めていっているわたしもその行為に快感を覚え始めている。

やがて意識という物もなくなって二人は、この辺りは皆一緒になる。

そろそろ時間が遅いし疲れてきたし、帰ろうかと考えているのはわたしでもあってこの辺り一帯でもある。席を立ってしまうと恐らく繋がりも切れてしまと分かっていて、それを少し残念に思っているのは男の人だしわたしだ。

でもその時は来る。チキンレースのように息を詰めて自分の手ではその時を訪れさせないようにと思っていても、少しずつ一体感はずれ始めていて、とうとう隣で席を立つ音が聞こえる。視界の端で茶のジャケットが上に大きく動く。

彼は立ちながら最後の一口、コーヒーを喉に流すとバッグを持ってわたしの脇を通って、出口へと向かってしまった。音が戻る。いつの間にか客層が入れ替わってミスドを満たす声は随分高くなっている。女が増えたのだ。色が戻る。華やか。

わたしは息を深く吐く。

あの人はこの時をどう記憶に留めてくれるだろうか。

わたしはたまにこういう経験をするから、次のためにこれを憶えておくことができる。でもあの人にはそういうことはないだろう。これから日々を送る時の元気に少しでもなってくれればいい。疲れた時に思い出して意識が破けるのを止めてくれればいい。

わたしは立ち上がってカフェオレを一気に飲む。あの人と同じように、でも今は、これはわたし一人の行為だ。

あほかアイツは。　階段を駆け下りながらぐるぐると頭を血が回っているのを感じた。
和田新二はあたしが告白したらああ、とかうう、とかそのまま一人で二時間も悩みまくったから、あたしは堪え切れなくなって屋上から下りてきた。あほか。
教室に入るとユートーセーが一人で本を読んでいた。なんだか無性に気になった。
「ねえ、それ貸してよ」
そうだ。今のあたしにはそれが必要なんだ。

●　●　●

どうして靴のにおいって気持ち悪いんだ？
蛍光灯の明かりがよそよそしい玄関であたしは靴箱を蹴った。時刻は八時で外は真っ暗。屋上を降りてからさらに二時間立っていた。
ずっと本を読んでいたけど、一度も和田新二は教室に降りてこなかった。
ユートーセーが外靴に履き替えて帰るのを見届けてから屋上に行くと和田新二はまだうなっている。あたしを見ると「ねえ、君のこと好きかもしれない、もしかしたら」とほざいたから、あたしは腹に一発お見

舞いして胸に頭突きをして「抱いてよ」と言った。
　ダメ男だって愛してやるヤツは必要なんだ。

「じゃあ、その墓に花を供えながら僕は、『馬鹿な奴だよ。ガキの頃と変わらないまま大人になっちまいやがって。だから社会に殺されたんだ』と、言います」
　そう僕がＧＭに告げたすぐに、目の前に座っているかの子が、心持ち前のめりになりながら、自分のキャラクターの発言を告げる。
「『でもでも、結局彼を殺したのは社会じゃないよ。わたしたちなんだ』」
　僕は声を失う。そういう終わり方はこれまでＲＰＧをしていて見たことが無かった。自信は無いけど、多分、映画とかでも見ていなかったんじゃないだろうか。
「と、いうところで、今回は終わりです。お疲れ様でしたー」
　ＧＭがセッションの終了を告げる。
「お疲れー。いや、最後のかの子の、よかったよねえ、セリフ」
「そうだね、綺麗にまとまった」
　僕の賛辞にＧＭが同意を示す。でもかの子は嬉しそうだったり照れくさそうな表情は見せずに、少し困った顔でこう言った。
「うーん。これ、『社会が彼を殺した』っていう話なの？」
「え、うんそうかな。四郎はよく拾ってくれたなって思うよ」
　ＧＭのその言葉で僕は得意になる。
「うん、なんかね、途中からそうなんじゃないかなーって思ってたんだよ」
「悲劇嫌いだった？」ＧＭは少し不安そうで声が細くなっている。
「うーん。いや、よく分かんなくて。社会が殺すってあるのかなあって。だって殺したのって結局わたしたちでしょ？」
「まあ、悲劇だったら悲劇だって、ＧＭが最初に言っとくべきだったかもね」
　僕はフォローを入れる。くだらないことでセッションの後味を悪くしたくないのだ。
「いや、そういうことじゃないんだけど……」
　おや？　でもかの子はそれで黙ってしまう。
「ま、とりあえず片付けるか」
　沈黙に耐え兼ねたのかＧＭがそう呼び掛けて、僕等はセッションに使った筆記用具やらサイコロやらサマリーやらを片付けていった。

　かの子は地下鉄を降りて自分の部屋へ帰る道すがら、頭の中でセッションのクライマックスを反芻していた。まるでプレイヤーである自分が手を下したかのように、生々しい銃の引き金の重さが、ラスボスの頭を砕く映像が目の前に焼き付いていた。
　右手を腹の辺りに持ってきて、見つめながら掌を軽く握っては開いてみる。通り過ぎるコンビニの光に照らされた筋が、不意に不気味な線に見えた。
　戦闘でサイコロを振った時には、実際はそんな感触をまだ持っていなかったことを思い出す。エンディングで自分が――自分のキャラクターが――「自分達が殺したんだ」と言った途端、遡ってその手の感触が生まれたのだ。
　悪いことをしたな、とかの子は思う。次回は、そのことをちゃんと憶えておいて、悩むキャラクターにしないとな。でないと偽者みたいになっちゃう。ラスボスに申し訳ないよ。
　マンションに辿り着いて鍵を開けて鞄を置いてコートを脱いでテレビを点けると、「彼もまた、社会の被害者なのかも知れません」と、夜のマンションを背景にニュースリポーターが言っているのが目に入った。

ニュースと言っても夜ののんびりした時間帯にやっている物だから、ワイドショー的な要素も入っている。
「いやあ、恐ろしいですね」と女の司会。
　隣に座る男の司会が、深刻な顔で言葉を受ける。
「そうですね。確かに、職も無くて、そのことを奥さんに黙ったまま毎日過ごして、収入が無いって分かったら、別れ話を切り出されても仕方ないかもしれませんが……」
「でも、包丁で刺してしまってはいけません」
「それでは次のニュースです……」
　かの子は胃がむかついてきてリモコンの電源ボタンを押してテレビを消した。
　テレビの余韻のような静けさが部屋に満ちていた。

　わたしはくすりと笑ってしまう。
　テレビからもバラエティ番組の観客の笑い声が響く。
　父は不器用で、外にいる時とうちにいる時の区別を巧く付けられない。今だって、どすんどすんどすんと三歩、長い足を動かすだけで、台所まで着いてしまう。家ではそんな風に歩かないでしょ、とわたしは思う。
　またどすんどすんどすん。父は水を汲んで来てソファに寝そべる。
　わたしはこっそりにやけ笑いをしてからすぐに消して「ねえお父様」
「ん？」とだけ答える父はしかし身を起こして座り直して、しっかりとわたしの目を見る。テレビからばかばかしいコントが流れてくる。
「明日、朝、友達と一緒に街まで乗せてってくんない？」
　早くもわたしは言葉を崩す。
「買い物行こうって約束だったんだよね」
　父は少し間を置く。考えている様子だ。いや、多分これから言うことをまとめているのだろう。
「いいよ。出発は何時かな。それに合わせて起きるようにする。あと、友達にもちゃんと、時間を伝えておけよ」
　普通はそんなにいっぺんに、喋らないのだ、日常会話では。
　コントに観客も司会者も他の出演者も爆笑してわたしはちょっと注意を奪われるけど、父はじっとこっちを見ている。一瞬、目だけ横に動いたが首は我慢して止めたようだ。
「うん。そうだな、十時くらいで宜しく」
　頷いてテレビに戻る父。一口コップから水を飲んでまたソファに身を預ける。
　わたしはテーブルに置いてあった携帯電話を手に取って、メールを打ちながら父をかわいいと思って穏やかに笑う。にやにや笑う。
　公も私もなく自分を律するようにいる父を尊敬したり疎んじたりするよりもかわいいと思って抱き付きたくなってしまう。でも我慢。それは母の特権なのだろう。わたしも早くそういう人を見付けたい。

　舞台は暗い。

イズミ　おはよう！
ユミコ　おはようございます！　遅くなりましたあ。今日も宜しくお願いします！
　上手から二人の女が歩いて来る。　直後。パッと全体、明るくなる。　舞台上は色とりどり。下手から順に爪、爪、リング、爪。着色済みのチップだ。下手には無地のネイルチップ、マニキュアもある。
　二人は何やら話している風であるが、声は聞こえない。イズミは既に仕事の格好で、ユミコは上着を着て鞄を肩に掛けている。　中央にミラー付きチェスト。　辿り着いてイズミがチェストの上に飾ってある一揃いのネイルチップを、指差す。　とりあえず、見るユミコ。

ユミコ　かわ……（いい、とお世辞を言おうと）
イズミ　今日は、随分素敵な爪だね。でもそれじゃ仕事になんない。
　ユミコ、自分の右手の甲を見る。左手を見る。かわいいチップも中指だけ無い。

ユミコ　げ。
　咄嗟に上着のポケットを叩く。中に手を入れてまさぐる。鞄も漁る。

ユミコ　ラッシュめ。
イズミ　（もう一度チェストを指して）それ。
ユミコ　描いてちゃダメですか。
イズミ　（ユミコの口調で）「遅くなりましたあ。」
ユミコ　つか、乾かないですよね。
　イズミ、無言ですたすた、下手へ去る。　ユミコは肩を落として、

ユミコ　よりによって、今日……。
　ゆるゆると鞄を肩から外し、思い切り、ぽーんと奥に投げる。上着も脱ぎ、ぽーん。両方ともチェストの奥へ。　自分の手の指から十個……九個のネイルチップを外してチェストの上に置き、新しいのを着ける。　イズミが下手からすたすた、やって来て、チェストを回し、その背を観客席へ向ける。ユミコの荷物は一応後ろに隠れた格好。　それからユミコの肩を叩く。

イズミ　さ。開けたよ。
ユミコ　はい……。あの、
イズミ　わたし、ちょっと裏にいるから。
ユミコ　えっ。
イズミ　朝は店の方しか手が回らなくて。
ユミコ　あ……すいません。
　チェストの裏に回るイズミ。抽斗を開けたり、閉めたり。書き物をしたり。　ユミコは一通り、店内を歩き回り、マニキュアと無地ネイルチップの前で止まる。きょろきょろと首を巡らす。誰もいない。

ユミコ　イズミさあん。
イズミ　（顔は見せず）んー？

ユミコ　お客さん来ませんねえ。
イズミ　朝だからねえ。
ユミコ　裏の仕事、終わりましたあ？
イズミ　そろそろね。
ユミコ　そしたら、
イズミ　今日一日は、そのチップね。
　ユミコは口を閉ざし、チェストの方をじっと見る。　下手から男が現れる。背広にコート。俯き加減。

ユミコ　いらっしゃいませえ。
　イズミがちょっとだけ顔を覗かせる。すぐに引っ込める。　男は踵を返して消える。素早い。また現れる。

ユミコ　いらっしゃいませえ。
　ユミコ、一歩下手へ。　男はまた消える。　また現れる。　ユミコ、もう一歩。無言。　男は足を止めて一拍、顔を上げる。　二人は見詰め合う。　男はくるりと消える。　ユミコはもう一歩、二歩三歩、下手へ進む。

ユミコ　プレゼントですか？
男　　え、は、はい。
　男が姿を現す。

イズミ　いらっしゃいませぇ。
　と、言いながら、店内に出て来て、上手側へ。　その間にユミコは男の前まで歩く。

ユミコ　どんな物を。
男　　あ、いや。
　男は忙しなく店内を見回す。ある方向で首を止める。　視線の先ではイズミが商品を並べ直している。マニキュアだ。隣にはネイルチップの列。

ユミコ　リングですか？
男　　や、ちが、
ユミコ　こんなのが人気ですよ。
　と、一つ、リングを指す。

イズミ　ユミちゃん、もうちょっと、見ていただいたら。
ユミコ　（イズミに）あ、はい。（男に）ごゆっくり、ご覧ください。
男　　そろそろ、時間なんで。
　と、下手に消える。　イズミがユミコに近付いて、

イズミ　プレッシャー掛け過ぎ。

ユミコ　はい、すいません。
イズミ　気を付けて。
ユミコ　イズミさん目当てですかねえ。
イズミ　爪でしょ。
ユミコ　次は邪魔しませんから。
イズミ　いらっしゃいませ。
　下手からまた別の男が出て来る。　カコである。ユミコと同年代。コックシャツを着て、帽子とエプロンは無い。

ユミコ　あ。
カコ　こんにちは。
ユミコ　休憩？
　さり気無く距離を取り始めるイズミ。

カコ　うん、危なかった。次だと夜になるから。
ユミコ　かわいいのあるよお。
　と、近くのセットを手で示すユミコ突然、両腕を自分の後ろに回す。

イズミ　わたし、続きあるから。
ユミコ　はあい。あ、わたしやりますよ。
イズミ　え。
　やり取りを見ているカコ。　ユミコは返事を待たず、そそくさとチェスト裏へ……　……行こうとするところで、下手に先ほどの男がまたも来る。　ユミコ、それに気付いて、

ユミコ　いらっしゃいませえ。
　そしてチェスト裏へ。

イズミ　いらっしゃいませ。
　男はゆっくりと、商品を見て回る。

イズミ　（カコに）ユミちゃんのお知り合いなんですか。
カコ　結構、お店だと違いますね。やっぱり。
イズミ　済みませんね。呼んで来ますか。
カコ　いや、こっち（と商品を眺める）に興味もあるんで。
イズミ　贈り物ですか？
カコ　そう、です、ね。まあまだ分かんないですけど何かいいのがあれば。
イズミ　お客様のご要望で、新しく作ることもできますので、お気軽にどうぞ。
カコ　やっぱり、自分でも着けてるんですね。
　イズミ、カコの視線を追うと、自分の手。　顔を上げる。

イズミ　はい。見られて恥ずかしくないようにしてます。

カコ　　自分で、塗るんですよね。
イズミ　妥協できませんよ。
カコ　　（商品を指しながら）これ全部？
イズミ　どれも、妥協できませんね。ユミちゃんの描いたのもあって。
男　　（奥へ向かって）すいません。
ユミコ　はあい。
　　と、出て来る。　　イズミとカコは尚も話しながら店の中を歩くが、声は聞こえない。

男　　あの、爪、マニキュア、描いてもらえるんですか。
ユミコ　あ、はい。大丈夫ですよ。ネイルチップですね？
男　　はい。娘に。
ユミコ　ご希望の柄など、ありましたら。色使いや、イメージでも大丈夫ですよ。
男　　１２歳なんですけど。こんな、
　　男、ポケットから何か取り出す。ネイルチップだ。一つだけ。

男　　こんな感じのが。
ユミコ　あっ！
　　イズミとカコ、そして勿論男も、ユミコを見る。　　イズミはカコに頭を下げてユミコの所へ。カコは一人で商品を眺める。ユミコの方に度々視線を送りながら。

男　　あの、どれくらい。
ユミコ　え、と。普通、三日くらい頂いてます。
男　　ああ……明日は無理ですか。誕生日で、娘の。
　　ユミコは、男の手のチップを凝視している。

イズミ　大丈夫ですよ。明日ですね。
ユミコ　え。
男　　ほんとですか。あの、すいません。
イズミ　はい。明日の朝までに用意しておきます。
男　　じゃあ、お願いします。いや、よかった。
イズミ　そちらのネイルチップは、明日までお預かりしてもよろしいですか。
男　　はい、どうぞ。全然、爪……ネイルなんて、考えてもいなかったんですけどね。拾ったんですよ今日。
　　ユミコ、跳ねるように顔を上げて男を見る。　　しかし男はイズミにチップを手渡していて、気付かない。

男　　それで、これなら娘にも似合うかな、と。
イズミ　喜ぶと思います。娘さん。
男　　はい。ありがとうございます。それでは宜しくお願いしますね。
　　男、下手へ向かう。

イズミ　ありがとうございました。
ユミコ　あ、ありがとうございましたぁ。
　　カコ、二人の後ろから、

カコ　　かわいいですね、それ。
ユミコ　わ。
イズミ　かわいいよね。ユミちゃんこういうの得意だから。明日でも間に合うでしょ。
ユミコ　あ、はい……。
カコ　　俺も同じのお願いしようかなあ。
イズミ　贈り物？
カコ　　はい。
イズミ　三日頂ければ、もっとかわいいのを考えますよ。
ユミコ　イズミさん。
イズミ　ユミちゃん、得意だから。
カコ　　ああでも、やっぱりいいです。
イズミ　はい。そうですね。
カコ　　じゃ、俺、そろそろ戻ります。
ユミコ　あ、うん。また来てよ。
イズミ　ありがとうございました。
ユミコ　ありがとうございましたあ。
　　カコ、下手へ歩く。姿を消す直前、

カコ　　他の店にあったら、買ってたなあ。
　　去る。　　ユミコとイズミはしばらく黙っている。後、

ユミコ　イズミさん目当てじゃなかったんですね。
イズミ　爪だったでしょ。
ユミコ　はーあ。
イズミ　かわいい、って。
ユミコ　イズミさんて意地悪ですよね。
イズミ　あの子はユミちゃんが目当てだったね。
ユミコ　爪ですよお。
イズミ　そうだね。爪だね。
ユミコ　イズミさんって、意地悪。
　　パッと暗転。真っ暗に。

爪って、観客席から、見えるんでしょうか。
小さな劇場なら大丈夫でしょうか？　目立つ色なら？

名前を出すタイミングってよく分からないですね。

障害が足りない。障害はあるのに障害として描かずユミコが回避してしまっている。

どんなファンタジーだよって内容。
実際店で働いている人、ごめんなさい。

練習帳

http://p.booklog.jp/book/32230

著者：s2

著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/s2it/profile

感想はこちらのコメントへ

http://p.booklog.jp/book/32230

ブクログのパブー本棚へ入れる

http://booklog.jp/puboo/book/32230

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）

運営会社：株式会社 paperboy&co.